

アベノミクスと金融市場・実体経済

翁邦雄（京都大学）

2012年秋、安倍晋三氏・現首相が、同年末の衆議院選挙に向けた選挙戦の過程で、大胆な経済政策プラン（いわゆるアベノミクス）を打ち出して以来、安倍氏の政策は日本の金融市場および実体経済に大きな影響を与えてきた。

日本銀行もアベノミクスの第一の矢としてその一翼をになう形での金融政策を展開している。具体的には2013年4月の金融政策決定会合で2年間で2%のインフレ率目標の達成にコミットし、これを実現するための方策として量的・質的緩和を打ち出した。そして、この決定会合後もこの方針に沿った金融政策運営を継続している。

しかしながら、「3本の矢（大胆な金融緩和、機動的な財政出動、民間投資を喚起する成長戦略）」から成るとされている「アベノミクス」についての公式的な見解と、現実に金融市場・実体経済に大きな影響を与えた安倍氏の政策は必ずしも同じではない。また、第一の矢とされる金融政策が為替市場・金融市場を大きく動かした最大の原動力であったわけでもない。

そうした一般的な理解と現実とのギャップを踏まえたうえで、たとえば、アベノミクスの重要な構成要素とされる金融政策の今後の展開がどのような要因に左右されるか、2%のインフレ目標達成後の金融政策が、金融市場・実体経済にどのような影響を与えうるのか、といった点について考察することを予定している。